

しおさい21のサポーターズメンバーをつなぐ会報誌、ついに創刊。「しおさいレポート21」

海辺を考える しおさい21が発足し一年が経過しました。この間、設立趣旨に則り海岸問題に関する勉強会や砂浜を再生させる実験研究を行ってまいりました。発足一周年を期に、「しおさいレポート21」を定期的に発行し、NPOの活動報告だけでなく、住民をはじめ多くの関係者の方々と意見を共有するレポート作りを目指す考えであります。全国的に海岸侵食が進み、高潮・高波に対する防災への影響は勿論であります。国土面積の消失等も言われています。しかし、砂浜の消失の影響は単なる数字として現れる以上に大きな影響を持っています。地球温暖化が進むにつれ、ますます多方面に亘りその影響が及びます。砂浜の持つ機能は、防災のみならず特に生態系への影響が危惧されます。砂浜は自然の浄化機能とそれによる沿岸環境の保全を果たしています。生態系のバランスの取れた循環は海の幸を保障します。また、美しい砂浜は、人間を含む多くの生物に快適な環境と人間に対して心地よい精神を育む環境と感動を提供してくれます。

創刊のご挨拶

海辺を考える しおさい21
 理事長 田中 博通

「このSHIOSAI Focus (しおさいフォーカス) では、海に関する様々な活動をされている方、また、海岸にゆかりのある方にいろいろな角度からお話を頂くコーナーにしていきたいです。今回は、駒越連合自治会長で清水海岸侵食災害防止対策促進期成同盟会副会長の堀嘉七氏に駒越海岸の思い出について綴って頂きました。

まずはじめに、「この度はしおさいレポート21の創刊、誠にありがとうございます。現在、日本の海岸環境は、侵食等により大きく変わってきております。私たちはこの海岸環境の変化を大変危惧しており様々な活動をしております。この海辺を考えるしおさい21には、科学的な検証や海岸環境保全の研究について大いに期待をしております。よりよい海岸を目指し活躍されることを願っております。今回は、以前静岡市清水区駒越地区コミュニティ紙でもお話をした駒越海岸の思い出について書かせていただきます。

今から約六十年前、私が小学校二年生のときですが、終戦となり子ども心にもある強烈な印象が残っています。

あの日八月十五日の昼前でしたが、私たち小学生の遊び友達「浜」(駒越海岸のこと、折戸湾は「いそ」と呼んでいた)に泳ぎにいこうとして、大屋敷通りに集まっていた。誰かが「放送があるよ。」といったので、直感的に何かを感じてK君の家に入り、ラジオを聞きました。当時のラジオは並4とかいって受信が悪く、雑音ばかりでしたが、誰かが低い声でほそほそ言っているのが聞こえました。子どもにはわからないはずがありません。大人の誰かが「日本は負けだよ。」と言ったのを聞いたとたんの驚きは今でもしっかりと覚えております。目の前が真っ暗になり、ふらふらと通りに出ました。真昼の炎天のまばゆさで、頭がくらくらしました。「戦争に負けた。」そんなはずはない。「誰も負けるなんていつてなかった。」敵が上陸してきたら僕だって竹やりで戦うんだ。「あの広い砂浜で戦うんだ。」と、ずっと思っていたので、とてもやさしかったのを覚えております。結局、その日は誰いともなく浜へ行くのは止めになりました。



土用波の駒越海岸

さて、その駒越海岸、すなわち「浜」は、当時は砂浜が100メートル以上ありました。今ではその広さをとても想像も出来ないでしょう。しかも波打ち際まで小さな黒い砂で覆われていました。安倍川河口から三保半島先まで、このような100メートル以上の砂浜でした。三保半島全体が安倍川から流れ出た土砂で形成された、「砂州」あるいは「砂嘴」なのです。先に、100メートル以上と言ったのは、正しくは畑の松の防風林から海までの砂浜の中です。なぜ、100メートルかと考えてみると、思い当たることがあります。昔は気象情報が発展していませんでしたから、台風がフィリピン付近で発生しても報道されません。台風により大波のほうが日本に早くきます。

地元ではこれを「土用波」と呼んでいます。台風の前触れとしての「土用波」は、空の晴れているのに、「浜」に大波となって打ち寄せるようになり、その三四日後に台風が襲来することを予告しています。その大波が打ち寄せて、傾斜している砂浜をかける距離が約100メートルほどですから、防風林には届かないわけです。波高5メートル位の「土用波」の打ち寄せるエネルギーはとも大きく、波打ち際から一気に砂浜を上げ上がりますが、その波も最後は白い海水の泡となり砂浜に吸い込まれてしまいます。砂浜が波のエネルギーを吸収しているわけですから海岸侵食は起こらないのです。いや、安倍川からの土砂の流出量が昭和二十年代より三十年代のそれと同じくらいあるかぎり、砂州は成長し続けるのです。

SHIOSAI REPORT 21

次号
特集
 しおさい21活動報告
 ワーキンググループ紹介

次号は2006年10月下旬発行予定です。

次号
 次号は2006年10月下旬発行予定です。

次号
 次号は2006年10月下旬発行予定です。

日本財団助成事業採択決定。

海の健全度の指標化に向けた、住民、事業者、観光客へのアンケート調査実施へ。

「この時代には、波打ち際からずっと沖の海底まで砂や小砂利が堆積して、海底が浅くなっています。海底が「土砂で肥えていた」と表現してよいでしょう。あの当時は「浜」では子ども達が自由に泳いでいましたので、水中眼鏡で海の底を見ると、砂が水の動きで海底から舞い上がり、またキヌも随分と多く泳いでいました。キヌは砂底を遊泳している魚です。昔は子どもでも、キヌを50匹くらい釣りに上げていました。いわゆる「入れ食い」でえさが三つあればキヌが三匹かかっていました。今は海底が荒れていて砂利ばかりですから、釣り人もいなくなりました。さて、今、土砂と言いましたが、砂浜の断面を考えると興味深い事実が分かります。安倍川からの土砂は、打ち寄せる波の作用により、砂の層と小砂利の層に分かれるのです。実は黒い小さな砂の層の下は、小砂利の層になっています。砂の層の厚さは場所により10センチだったり、50センチだったり、一定ではありません。どうして砂の層があるのでしょうか？先ほど言いましたように、「土用波」の大きなエネルギーは、打ち寄せた波は、砂浜を上げるほどスピードが遅くなり砂浜に吸い込まれるため、最初に小砂利を、そして最後に砂を堆積させているのです。私の経験によると一晩で四〜五〇センチの堆積があることも珍しくありません。波のエネルギーはそれほど大きいのです。当時、「浜」では地引網が仕掛けられたり、塩田が作られ製塩も行われていたのですから地元漁師やその手伝いの人々、見物の子ども達、製塩の業者など、ほんとに大勢の人が毎日のように「浜」に「浜」に親しんでいました。子どもたちは、夏休みともなると朝から「浜」に泳ぎに出かけ、お腹がすくか、のどがかわくかしないかと家に帰りませんでした。地引網を引いたり、いや、網にぶら下がっているほうが多いのですが、漁師さんは叱りませんでした。楽しい夏休みを過ごしました。

これが私の思い出です。



堀 嘉七 氏
 駒越地区連合自治会長
 清水海岸侵食災害防止
 対策促進期成同盟会副会長

日本財団 The Nippon Foundation

HIRATE 株式会社ヒラテ技研

VEGA 株式会社

Imagine of Seashore SHIOSAI 21

COLLABORATION SUPPORTERS

東海大学 海洋学部

ナカダ産業株式会社

芙蓉海洋開発株式会社

SHIOSAI 21.jp

海辺を考えるしおさい21 ホームページ開設!!

このたび、海辺を考えるしおさい21のホームページを開設致しました。内容については今後もどんどん改良していきたいと考えております。ぜひ一度ご覧ください。